

2022 年度 FD支援プログラム 中間報告書

- ・プログラム名称:「アカデミック・ライティング」のテキスト作成と継続的な指導法の確立
- ・申請者氏名:下地賀代子(日本文化学科)
- 共同申請者:安志那(日本文化学科)、我部大和(日本文化学科)

日本文化学科では2年次必修科目「アカデミック・ライティング」(3クラス)において、レポートや論文作成に必要な学術的文章に関する知識・技術(アカデミック・スキル)の向上、論理的思考法の習得を目的とする授業を行っている。今年度のFD支援プロジェクトでは、前年度まで使用していた配布用の講義資料の内容を見直し、アカデミック・スキルに関する項目を強化、また新たに「パラグラフ・ライティング」に関する項目を追加するなどの改訂作業を行った講義資料(「プレテキスト」)の検証作業を主に進めてきた。

申請者らは2022年度の「アカデミック・ライティング」の担当者でもあり、前期の同講義においては実際にこのプレテキストを用いて授業を行った。そして、授業終了後の2022年8月中に2回、2023年1月に1回の計3回、プレテキストの内容に関するミーティングを実施し(オンライン・対面)、内容の問題点を報告、どのように改善すべきかを話し合った。その内容をふまえ、編集責任者として下地がプレテキスト全体を見直し、次年度用のテキストの原本となる原稿を完成させた。2023年2月現在は印刷会社と製本のためのやり取りを進めており、3月中に納品、新年度には本学科学生に「アカデミック・ライティング」のテキストとして配布できる見込みである。また、授業で課す課題などを元に次年度の「アカデミック・ライティング」のSA候補学生を3名選出し、現在申請手続きを進めている。

その他、2023年2月に名桜大学に赴き、同大学ライティングセンター長の大嶺光博先生へのインタビュー調査と、ライティングセンターの視察を行った。インタビューでは、センターの具体的な活動内容および運用、またチューター指導に関する知見を伺うことができた。また、次年度の視察についても了解をえることができた。

一方、本プログラムのもう1つの目的である「日本文化学科のライティング・センターの実質化」については検討が不十分であり、次年度も継続して活動を行う必要がある。コロナ禍の影響もあり、今年度は他大学のライティングセンターの視察、指導に関するインタビューも十分に行うことができなかった。次年度のSA候補学生を中心とした継続的なチューター育成と、学科に実情に即した効果的な運用のあり方について、さらなる検討を重ねる必要があると考える。